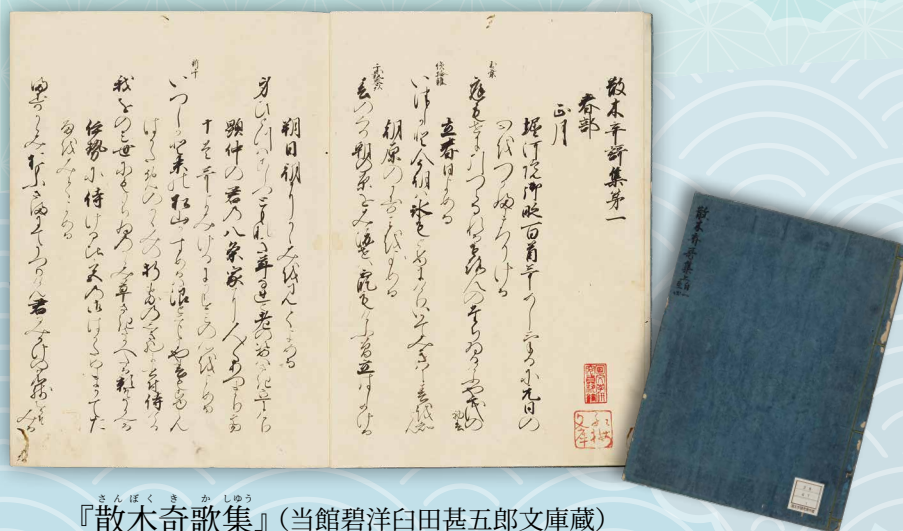


## 国文研ニュース

No.67 SUMMER 2025



『散木奇歌集』(当館碧洋白田甚五郎文庫蔵)

## 目 次

## ●メッセージ

明治期以降の直筆資料のアーカイブ化について ..... 安藤 宏 2

## ●研究ノート

特定研究(地域資料)「東北大学狩野文庫の研究」の概要と成果 ..... 佐倉 由泰 3

特定研究(地域資料)京都市歴史資料館寄託山本家所蔵資料など賀茂両社および杜家伝来の古典籍資料に関する研究 … 小林 一彦 4

特定研究(地域資料)相愛大学「春曙文庫」に関する研究―書物と人 ..... 千葉 真也 5

特定研究(地域資料)「正宗文庫の研究」報告 ..... 川崎 剛志 6

特定研究(地域資料)中川文庫(祐徳稲荷神社)の総合的研究 ..... 村上 義明 7

## ●書評

ブックレット〈書物をひらく〉32 中西智子著『紫式部の「ことば」たち 源氏物語と引用のコラージュ』 ..... 和田 律子 8

大関真由美・菅井優士・西村慎太郎編著『古文書解説事始め―福島県大熊町の古文書で学ぶくずし字入門―』 ..... 田仲 桂 9

## ●トピックス

2024年度こくぶんけんトーク『源氏物語』をよんだ中世人―解釈の揺れはいかに生まれたか― ..... 岡田 貴憲 10

国文学研究資料館・たましん美術館 共催展示「源氏物語の新世界―明け暮れ書き読みいとなみおはす―」 ..... 河田 翔子 10

ないじえるトークイベント&amp;ワークショップ 源氏とあそぶ。源氏をまとう。 ..... 黄 昱 11

福島県双葉郡大熊町と国文研との学術協定締結 ..... 西村慎太郎 12

国際連携部「文献資料ワークショップ」～デジタル時代にこそ原本に触れて～ ..... ノット・ジェフリー 12

第48回国際日本文学研究集会 ..... 劉 娟 13

人文機構研究プロジェクト国文研ユニット「人口減少地域におけるアーカイブズと歴史文化の再構築」シンポジウム

『終わっていない、逃れられない〈当事者たち〉の震災俳句と短歌を読む』刊行記念 言葉にできない空気をぶっとばせ! … 西村慎太郎 13

国文学研究資料館のホームページがリニューアルします! ..... 北村 啓子 14

Web展示「和書のさまざま―RIN-NE」を公開しました。 ..... 北村 啓子 14

総合研究大学院大学日本文学研究コースの近況 ..... 15

## 明治期以降の直筆資料のアーカイブ化について

安藤 宏（国文学研究資料館運営委員、東京大学名誉教授）

専門が近代文学なので、それに関するトピックになることをお許し頂きたい。

おそらく「近代文学」と他の時代のそれとを区別する大きなポイントは、形態的には活字と原稿用紙にあるのではないと思う。むろん、活字は中世からあるし、江戸期の自筆稿本なども残ってはいる。しかし近代という時代ほど作家の直筆原稿が多く現存し、抹消跡や書き換え跡も含め、活字との間の試行錯誤を検証することのできる時代はほかにはないだろう。おそらく後世から見たとき、1980年代のワープロの普及以前と以後との間に、「近代文学」とそれ以降の文学との大きな境界線が引かれることになるのではないだろうか。問題はこの百数十年に及ぶ「原稿用紙の時代」を、一個の文化資産、さらには研究対象としてどのようにアーカイブ化していくか、という点にあると思うのだが、実はこの点に関しては、まだ、すべてが渾沌としたスタートラインにあるというのが実情なのである。

その意味でも本館がかつて「近代書誌・近代画像 DB」を立ち上げ、2022年にかごしま文学館の島尾敏雄直筆原稿の画像をアップした事業には大きな意義があったと思う。地方の文学館が自前でデジタル化、オンライン化を進めるのは困難で、それにプラットフォームを提供するという、画期的な試みだったわけである。その後、中原中也記念館の直筆原稿（2023）、武者小路実篤記念館の自筆資料（2024）などがアップされ、これらは昨年の春に「国書 DB」に統合され、現在に至っている。ここで一つ要望を記させて頂きたいのだが、現在の「国書 DB」では、明治以降の作家の直筆資料について、そもそもどのようなものが収載されているのかという一覧を見ることができない。トップページから該当資料にたどり着くこと自体がなかなか困難で、事実上、宝の持ち腐れになってしまっているのである。このデータベースは当然のことながら古典籍であることが前提に作られていて、明治以降の資料に関しては明らかにユーザーズインターフェイスに問題があるようだ。冒頭に記したように、近代の直筆資料はそれ以前の時代のものと大きく異なる特色を持っているので、せめて「自

筆原稿」という検索項目を作って利用できるように改良して頂きたいものである。

そもそも近代の直筆資料のデジタル化が一般に注目されるようになったのは2010年代になってからで、この時期、作家と言えば中島敦、小林多喜二、太宰治など、また、瀧田梧陰（「中央公論」編集長）、山本実彦（「改造」社主）のコレクションなどが次々に CD ロム化、あるいはオンライン化されて売り出されたのである。だが、値段も高額で、オンライン化された商品も、普及率はごく限られたものだったようだ。大変有益な事業ではあったけれども、そもそも公共性、という観点から、個別の商品化には馴染まぬもののなのだと思う。

先に、文学館が自前で自筆資料をオンライン公開することは難しいと述べたが、それでもここ数年、県立神奈川近代文学館で夏目漱石、中島敦をはじめとする資料が、また山梨県立文学館で芥川龍之介、樋口一葉、太宰治の自筆資料の画像が無償で公開されるなど、ここにきて、さまざまな試みが実践され、事態は大きく進展しつつある。だが、たとえば美術館関係の資料に比べると文学館関係の資料のデジタル化、オンライン化はまだ大きく後れを取っており、それが国際的、学際的な研究の立ち後れる要因の一つにもなっているのではないと思う。

そもそも直筆資料というのは一部の好事家や個人のコレクターが私蔵するところから出発した経緯があり、まずは公共機関に収蔵されている資料を一覧、あるいは検索できるデータベース作りをすることが急務であろう。たとえば全国文学館協議会のような組織が主体となって、国文学研究資料館がその作業をアシストしていくような形がとれないものだろうか。10年かけて行われた古典籍の巨大なプロジェクトに比べればあまりにささやかな次元だが、いずれは本館、あるいは資料の総元締めともいえるべき日本近代文学館、さらには国立国会図書館などが大同団結し、国家的な事業として、この百数十年に及ぶ文化資産をアーカイブ化していかなければならないのだと思う。



## 特定研究(地域資料)

### 「東北大学狩野文庫の研究」の概要と成果

佐倉 由泰(東北大学教授)

本共同研究は、2022年度から2024年度までの3年間、狩野文庫を中心とした東北大学の特別コレクションの形成、維持の経緯と所蔵典籍の意義を明らかにすることを目的として、①「狩野亨吉の研究」、②「狩野文庫と所蔵典籍の研究」、③「狩野文庫以外の東北大学の特別コレクションと所蔵典籍の研究—漱石文庫、旧制第二高等学校旧蔵書を中心に—」、④「小宮豊隆の研究—東北帝国大学附属図書館長在任期を中心に—」の4つを考究の柱として、その融合を図る中で実施した。研究組織は、佐倉由泰を代表者とし、于楽(アジア太平洋無形文化遺産研究センター)、笠間はるな(宮城学院女子大学)、加藤諭(東北大学)、河内聡子(東北工業大学)、齋藤真麻理(国文学研究資料館)、仁平政人(東北大学)、横溝博(東北大学)、渡邊美希(東京工業高等専門学校)を分担者とする全9名で〔所属は2024年度時点〕、東北大学大学院文学研究科博士後期課程の越田健介、笠谷美弥の2名が調査、考究に協力した。

東北大学の特殊文庫の形成、維持の経緯と所蔵典籍については、先人の記録、保存、調査、研究によって多くの知見が得られた一方で、書籍、資料が膨大で多岐にわたり、受入以降、多年を経たこともあって、不明であることも少なくない。こうした解明を要することの1つに、狩野亨吉旧蔵の約108,000冊の典籍をはじめとする狩野文庫の中に未公開の古筆切等500点以上があり、その全容を捉えるという課題もある。本研究の初年度の2022年度は、上記②の研究として、特にこの狩野亨吉旧蔵の古筆切等に注目して、概要を確かめ、検討し、その結果を第1回東北大学狩野文庫セミナーで提示した(2023年3月27日、オンライン)。そこでは、佐倉由泰の報告「東北大学狩野文庫所蔵の古筆切について」をもとに、参加者による情報交換、意見交換を行った。当該資料については、今後、東北大学附属図書館を中心に、公開の内容、時期等を検討して行くことになると考えられるが、本セミナーは、その新たな進展を促す契機になったと思う。

2023年度は、1943年の狩野文庫の形成の完了と、1944年の漱石文庫の創設に決定的な役割を担った、当時の東北帝国大学附属図書館の館長、小宮豊隆に注目し、この文化事業の経緯と、それを支えた小宮の文化人としての思考、識見、交流を明らかにすることに、多くの時間と労力を充てた(先述の②、③、④の研究に主に該当する)。その研究で特に重視したのは、福岡県京都郡のみやこ町歴史民俗博物館が所蔵する小宮豊隆資料である。これは、小宮豊隆の御遺族の寄贈により保存されている貴重な資料で、小宮が受け取った多くの書簡と、小宮が日記、覚書として記した手帳等から成る。2024年1月には、博物館の理解と協

力をいただいて調査を実施し、その前後の検討もあわせて考究を深め、成果を第2回東北大学狩野文庫セミナー(2024年3月29日、オンライン)で提示した。そこでは、2つの報告、仁平政人「研究者・文化人としての小宮豊隆」、笠間はるな「小宮豊隆と東北大学の特殊文庫の形成—小宮宛ての書簡から—」と、加藤諭によるコメント「小宮豊隆と東北大学」を行った上で、参加者の間で意見や情報を交換した。参加者が、本研究の担当者・協力者の枠を大きく超え、みやこ町歴史民俗博物館、新宿区立漱石山房記念館、九州大学、国文学研究資料館、東北大学の教職員、学生に広く及んだ点でも、たいへん有意義なセミナーとなった。

その成果は、2024年度の研究にも直結し、仁平政人が、新宿区立漱石山房記念館の特別展『『三四郎』の正体 夏目漱石と小宮豊隆』(期間2024年10月12日～12月15日)の開催に協力し、同特別展の図録(2024年10月12日発行)に「漱石文庫と小宮豊隆」と題する論考を寄稿するとともに、期間中の11月23日に同館で開かれた特別展記念講演会「小宮豊隆という多面体」では、市民の方々に向けて講演を行った。また、2025年1月には、みやこ町歴史民俗博物館での再度の調査を実施し、小宮豊隆資料についての理解をいっそう深めた。さらに、同月には、神奈川県立神奈川近代文学館において、所蔵されている小宮豊隆からの小林勇宛書簡、夏目純一宛書簡を調査することもかない、1943年の狩野文庫の形成の完了と、1944年の漱石文庫の創設をめぐる新たな知見を得ることにつながった。こうした一連の調査、考究の成果は、第3回東北大学狩野文庫セミナー(2025年3月31日、オンライン)での2つの報告、笠間はるな・越田健介「小宮豊隆と狩野文庫の形成—神奈川近代文学館蔵小林勇資料から—」、仁平政人「漱石文庫の成立と小宮豊隆—書簡・手帳を手がかりに—」でも提示できた。本セミナーについては、東京大学の教員や、総合研究大学院大学、東北大学の多くの学生も含む、第2回セミナー以上に広範な参加者を迎えられたこともありがたかった。本共同研究の成果は、今後さらに論文等の形で発表することを予定している。

以上のように、本研究は、課題を解決することに加え、新たな課題を発見し、その解明のための新たな環境を創ることに多くの意義を持つものとなった。その意義の重要性は、東北大学の特別コレクションについての今後の考究を通して証されるところも大きいと思う。そうしたさらなる研究の進展を期するとともに、本共同研究を進める上で多大な示唆と教示をいただいた曾根原理氏(東北大学。2025年2月26日御逝去)への心からの感謝と敬意を込めて、本報告を閉じたい。

## 特定研究(地域資料)

京都市歴史資料館寄託山本家所蔵資料など  
賀茂両社および社家伝来の古典籍資料に関する研究

小林 一彦(京都産業大学教授)

当該共同研究は、2022年4月より3か年計画でスタートした。メンバーは小林(研究代表者)・宇野日出生氏・盛田帝子氏・松中博氏・大山和哉氏・雲岡梓氏・宮武衛氏・渡辺悠里子氏、国文研から神作研一氏、中西智子氏が参加した。完成年度には京都市歴史資料館寄託山本家資料展「賀茂季鷹と古典の「知」」(2024年10月19日～11月24日)を京都歴史資料館(以下「京歴資」)にて開催、会場で配布した展示リーフレット(カラー版)に、研究の成果を盛り込み、公開した。会期中はメンバーによるギャラリートークも行われた。京歴資の公式発表では、市民を中心に来場者は2750名にのぼった。

振り返れば、国文研に勤めていた小林健二氏から小林あてに、京歴資に寄託されている山本家所蔵資料を、盛田氏と万波寿子氏と3名で調査してほしいとメールが届いたのは、2011年3月のことだった。居住地も職場も離れていた3名だったが、当時、京歴資に勤務していた宇野氏と連絡を取りながら調査を進め、2016年10月、1332点の資料のほぼすべてをカードに収めて終了した。

その後、小林健二氏から担当を継いだ神作氏と小林の間で、この調査カードを台帳にデジタル撮影、そして本格的な研究ができた、という話がたびたび交わされた。しかし2019年度に起こった新型コロナのパンデミックにより、社会活動は大きく制限され、移動を伴う古典籍の地道な研究には厳しい時期が続いた。

2021年、盛田氏が小林の勤務校に着任したことで、共同研究の気運が一気に高まった。ただし山本家所蔵資料は重要文化財「清輔本片仮名古今和歌集」をはじめ、その多くが京都市の指定文化財である。立川の国文研に移送しての撮影は、困難だと思われた。けれども、山本家ご当主山本義浩氏のご理解、京歴資館長の井上満郎氏のご高配、そして学芸員の松中博氏の尽力により、移送・撮影が許された。デジタル画像による研究がどこからでも自在に行える道が拓かれたのである。こうして、天の時・地の利に人の和も得て、研究体制が整った。

初年度の2022年、まず全員が京歴資に足を運び、原本の調査を実施した。古典籍への知見を深めるために、今治市河野美術館にお願いし、集中的に鎌倉・南北朝期の古写本を閲覧する贅沢な宿泊勉強会も行った。三手文庫や下鴨神社にもそれぞれで足を運び、また関連する書物の調査

のために各地へ赴いた。獲得された知見は、毎年秋の「賀茂社家古典籍セミナー」で公開した。3回のセミナーでは、すべてのメンバーが講師をつとめたほか、ゲストとして賀茂県主同族会の山本宗尚氏を招聘し基調講演「三手文庫の設立と蔵書の変遷」をお願いしたこともあった。

3年間の共同研究を通じて国文研ならではの、得がたい経験もあった。2つほど紹介したい。

1つは、毎年夏に行われる、複数の共同研究のメンバーが立川で一堂に会し、互いの進捗状況やその時点での成果を共有しあう合同研究会での出来事である。松野文庫の共同研究に便乗して蔵書を披見する恩典に恵まれた。偶然、版本の二十一代集を手にとってみると、びっくりと書入れがある。おや? 見覚えが、と階下で紙焼写真を参照すると、はたしてその書入れは、三手文庫蔵今井似閑奉納本の契沖書入れの忠実な写しであった。急遽、午後小林の報告はホットな発見に変更された。

2つめは正宗文庫の共同研究に皆でお邪魔して、岡山に出かけた折のこと。蔵書調査中の小川剛生氏が手元のエクセルデータから「季鷹」を検索、ヒットした何点かを運んでくれた。その中に古今和歌集(正徳3年刊本)があった。剥落した後見返し裏面に敦夫の和歌の師、松浦辰男の朱筆識語が記され、明治29年に山本邦保(季鷹子孫)から「清輔本片仮名古今和歌集」を借出したとある。直ちに国文研の国書データベースにアクセス、京歴資寄託の当該本の画像と比較してみると、本文の校異、朱墨の書入れ、堪物まで細大漏らさず辰男が書き写していたことが確かめられた。季鷹は蔵書を惜しみなく貸し出しており、貸出簿にあたる「歌仙堂書籍出納録」は展示の目玉、いわば上賀茂私設図書館である。その季鷹の精神は明治時代の子孫にも、受け継がれていたことになる。しかし展示リーフレットは完成し特別展まで1か月しかない。松中氏と相談し、パネル展示で、と決める。翌日の岡山県立博物館でのセミナーの席上、神作氏が正宗千春理事長にお願いすると口頭で許可が下りた。こうして辰男の識語を引き伸ばしたパネルが、「清輔本片仮名古今和歌集」の陳列ケースの壁面を飾ることになったのである。

国文研でなければできない地域資料の共同研究、実に有意義で楽しい3年間だった。

## 特定研究(地域資料)

## 相愛大学「春曙文庫」に関する研究―書物と人

千葉 真也(相愛大学名誉教授)

本研究は「枕草子」を中心とするコレクションである「春曙文庫」について、資料のみならず田中重太郎を中心とする人々の古典に寄せる思いを紹介し、主要な資料について「春曙文庫」設置後の知見を加えようとするものである。

「春曙文庫」は、相愛女子短期大学・相愛大学の教員を長く務め、「枕草子」研究に功績のあった田中重太郎(1917～1987)旧蔵の貴重書を中心に構成されている。相愛学園創立百周年を記念して、1988年、相愛大学図書館に収蔵することとなり、枕草子の冒頭句「春は曙」をこよなく愛し、「春曙庵主」をもって任じた田中の遺志を尊重し、「春曙文庫」と名付けられた。文庫には、田中と親交の厚かった吉田幸一旧蔵の古写本も加えられ、枕草子に関わる資料なら、絵画や近代資料に至るまで収集した田中の夢を実現した文庫となっている。また、「校本枕冊子」制作に携わり、相愛女子短期大学において、田中の傍にあった柿谷雄三(1930～2012)旧蔵の典籍も「柿谷文庫」として相愛大学に収められている。柿谷は文庫創設にあたってでも尽力した。

「春曙文庫」は、平安文学の研究者以外には、一般に知られているとは言えない状況にあった。コレクション全体を紹介する刊行物に1988年の「相愛学園創立百周年記念古典籍資料展示目録」、1993年に「春曙文庫目録(和装本編)」があるが、前者は比較的詳しい解説があるものの、配布の要望に十分応じることが出来ず、後者は書誌に重きを置いた研究者向けの目録である。毎年、定期展覧を催しているが学内向けであり、市民の来場者は数えるほどである。

本研究はコレクションの全体像を明らかにするとともに、研究者以外の市民がコレクションに触れる機会を提供し、コレクションについての認識を深めることを意図した。

期間は2022年4月から2025年3月まで。研究組織は代表者の千葉真也、研究分担者の阿尾あすか・荒井真理亜・飯田実花・川渕紗佳・北井佑実子・溝端悠朗・山本和明の8名からなる。また、2024年3月から4回実施されたセミナーにあたっては鈴木徳男・中島和歌子・中西健治の各氏に講師としての協力を得たほか、相愛大学図書館司書の日野優子が資料の出納、取材への対応などにあった。

研究者と市民を対象に4回のセミナーを開催した。概要は次のとおりである。

- 2023年3月4日第1回講演：鈴木徳男「春曙文庫の成立」、報告：溝端悠朗「相愛大学春曙文庫蔵『源氏之詞並家隆

卿之庭訓口義』について」、北井佑実子「春曙文庫の古筆切一伝阿仏尼筆狭衣物語切について」

- 2024年3月2日第2回講演：中島和歌子「清少納言の父一清原元輔と『枕草子』の関係」、報告：川渕紗佳「国学者の『枕草子』研究、阿尾あすか「書写し伝える一柿谷雄三旧蔵『建礼門院右京大夫集』について」、山本和明「柿谷文庫について」
- 2024年11月1日第3回講演：鈴木徳男「春曙文庫に学ぶ」、千葉真也「関根正直書入本春曙抄と枕草子集註」、山本和明「柿谷雄三愛蔵の典籍点描」
- 2025年3月8日第4回講演：中西健治「春曙文庫から学んだこと」、報告：飯田実花「春曙文庫の『源氏物語』一聖護院道澄ほか筆『源氏物語』五十三帖・近衛信尹筆「光源氏由免濃有喜八之」を中心に」、阿尾あすか「伝説の清少納言―春曙文庫の蔵書から―」

第3回は国文学研究資料館の展示「枕草子と春曙文庫」に合わせ、立川の国文学研究資料館で開催した。それ以外は大阪の相愛大学南港学舎が会場である。

また、セミナーに合わせリーフレットを作成した。

- ①「春曙文庫の名品1 春曙文庫の枕草子」②「春曙文庫の名品2 知られざる名品 古筆切・断簡・清少納言の肖像」③「春曙文庫の名品3 勅撰和歌集・古筆切・断簡」④「春曙文庫の名品4 知られざる名品」⑤「春曙文庫の名品5 近代文学関係資料」⑥「春曙文庫―枕草子 絵画と伝承」⑦「春曙庵主 田中重太郎 その人とことは」

①から④は、本コレクションを代表する資料についての画像と解説。個々の資料について新見が提示されているところも多い。親しみやすい解説を意図したが、できあがてみると専門家向けになってしまっている。内容的には国文学研究資料館での展示「枕草子と春曙文庫」の図録と重なる。⑤は岡田希雄に宛てられた鈴木三重吉や与謝野鉄幹・晶子の書簡や相愛高等女学校校友会誌『相愛』に収められた山崎豊子の作文など珍しい資料を紹介する。⑦は田中重太郎の文章のうち、書物についての思いを語ったものや枕草子研究(田中の書き方に従えば「枕冊子」である)に関わるものを多様な資料から抽出したもの。本研究のタイトルは「相愛大学「春曙文庫」に関する研究―書物と人」である。国文学研究資料館での展示図録をもとにしているが、書物を愛する人であった田中を知る近道となるだろう。



## 特定研究(地域資料)

## 「正宗文庫の研究」報告

川崎 剛志(就実大学教授)

本共同研究は、2022～24年度、正宗文庫(岡山県備前市)所蔵資料を対象として、郷土資料及び重要資料に関する研究ならびに正宗敦夫研究を行ったものである。正宗文庫は、国文学者で歌人の正宗敦夫(1881～1958)が丹精込めて収集した古典籍・文書・短冊類を中心に、昭和11年(1936)、郷里に創設された。蔵書数は7,000点、20,000冊を超える。

《研究代表者》川崎剛志、《研究分担者》小川剛生、尾崎名津子、竹内洪介、長福香菜、新美哲彦、野澤真樹、丸井貴史、山本秀樹、神作研一(館内担当者)の10名で、【A】正宗敦夫研究、【B】郷土資料に関する研究、【C】源氏物語や近世和歌ほか注目資料に関する研究、という三つの柱を立てて研究を進めた。

主な研究成果を摘記すると、【A】金光図書館報『土』に連載された、文庫資料・桂園派歌人・郷土儒者等に関する敦夫の随筆の紹介と評価(正宗文庫監修・小川剛生編『正宗敦夫文集1 ふぐらにこもりて』平凡社東洋文庫、2024)、詠歌・出版・研究など多方面にわたる敦夫の活動の総合評価、【B】近世以来の豊饒な岡山の学芸(熊沢蕃山・湯浅常山・土肥経平ほか)の継承という視点から、また井上通泰・塚本吉彦ら中心とする吉備史談会(1899～1902)での学びを踏まえた、郷土資料の個別・総合評価、【C】数十年来所在不明で、近代の転写本で研究されてきた『俱舎論音義』(〔鎌倉時代〕写)の再発見、近世岡山和

歌史の至宝、浅野由隆編『吉備和歌集』、岡俊直撰『吉備和歌打聞』の評価などがあげられる。

本研究の最も大きな特長は、資料の調査・収集、研究、地域貢献を緊密に連動させたところにあり、研究成果を地域と共有することに力を注いだ。2022年度、第2回正宗文庫セミナー開催(就実大学)。2023年度、国文学研究資料館・正宗文庫・岡山県立博物館・就実大学人文科学部の間で協約書を交わし、「正宗文庫と正宗敦夫展」(岡山県立博物館主催)を開催し、展示リーフレット作成(国文学研究資料館・就実大学人文科学部発行、国文学研究資料館学術情報リポジトリでも公開)、第3回正宗文庫セミナー開催(同館)、ギャラリートークを実施した。観覧者数は2,000名超。その盛況と地元からの評価を受けて、2024年度も同じ体制(博物館との協働はより緊密に)で「岡山の至宝—正宗文庫の輝き—展」を開催した。展示リーフレット作成、第4・5回セミナー開催等も同様。観覧者数は2,500名超。

なおこの一連の活動は『山陽新聞』で報道され(22/09/25、23/10/18、24/09/22、同12/08、同12/21各朝刊)、また『岡山地方史研究』162号(24年6月)でも展示内容の紹介や観覧記が掲載されるなど、地元における正宗文庫再評価の機運も高まった。



第5回正宗文庫セミナー(2024年10月13日、岡山県立博物館)



正宗文庫前にて(2022年9月11日)

## 特定研究(地域資料)

## 中川文庫(祐徳稲荷神社)の総合的研究

村上 義明(熊本学園大学准教授)

## はじめに

2022年度より3か年にわたって、祐徳稲荷神社(佐賀県鹿島市)にて行われた共同研究「中川文庫(祐徳稲荷神社)の総合的研究」の主たる目的は、これまで長きにわたり調査が続けられてきた中川文庫の全体像を把握しうる目録の作成と、当該文庫の特徴や、そこに蔵される興味深い資料などを地域の方々へ向けて解説する「中川文庫セミナー」の開催であった。

## 中川文庫の目録

本研究では、中川文庫の資料を①歴史史料、②近代書籍、③漢籍、④国書(近世)の4つに分類し、それぞれの目録の作成を目指した。

①は高橋研一氏により「中川文庫(祐徳稲荷神社蔵)総合目録 歴史史料編」(国文学研究資料館学術資料事業部『調査研究報告』第44号、2024年3月)として公表された。ここには日記編・近世文書編・近代文書編に分けられた1182点の史料が掲載されている。また②は井上洋子氏と高橋研一氏により「中川文庫(祐徳稲荷神社蔵)総合目録 近代書籍編」(国文学研究資料館学術資料部『調査研究報告』第45号、2025年3月)としてまとめられ、単行本・逐次刊行物・洋書の大分類のもと2123点の書誌が紹介された。そして③と④は近年中に完成予定である。

## 中川文庫セミナー

本研究では中川文庫セミナーを5回開催した。各会とも祐徳稲荷神社参集殿において2名が登壇した。書誌学・近世史・近代史・注釈・地誌・戯作・謡曲・歌学に関する幅広い内容を地域の方々へお伝えすることができた。以下に各回の講師と演題を挙げる。

## 〈第1回〉2022年10月23日

入口敦志「蔵書のはじまりー古活字版の時代ー」

高橋研一「鹿島藩主夫人篤誠院とその書物」

## 〈第2回〉2023年5月13日

川平敏文「徒然草はどう読まれたか」

ー中川文庫蔵『徒然草直談抄』を中心にー

井上敏幸「名著『鹿島小志』」

## 〈第3回〉2023年7月22日

吉田 幸「異国あれこれ」

ー『風流志道軒伝』『櫛土一覽』を例としてー

進藤康子「鹿島藩第六代鍋島直郷の文事を支えた人々」

永井文安(洵美)の事跡を中心に」

## 〈第4回〉2023年12月2日

村上義明「松浦佐用姫の謡曲を読む」

中山成一「武富廉斎と『異説百人一首五箇秘』」

## 〈第5回〉2024年7月28日

山田洋嗣「『万古後拾新』の意味ー抄出と手控えー」

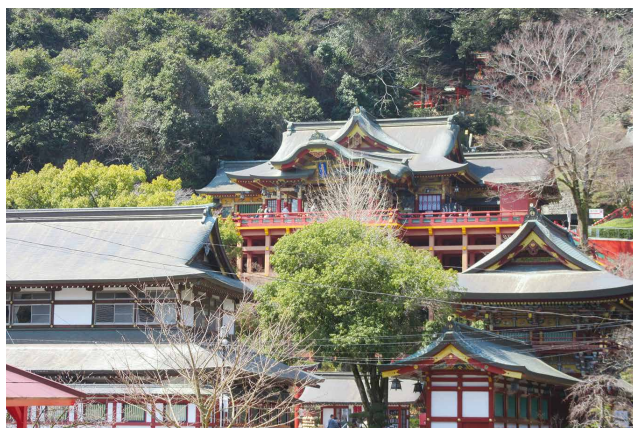
井上洋子「中川文庫と沖縄」

ー『沖縄対話』の役割を振り返る

そして、当該セミナーのまとめとして、2025年3月9日に中川文庫シンポジウム「中川文庫の過去・現在・未来」を開催した。パネリストは、井上敏幸氏・高橋研一氏・入口敦志氏の3名であった。中川文庫の過去について話された井上氏は、目録は文庫の顔であり、また地域の特色であること、それから文庫を広く世界に知ってもらうことの必要性を説かれた。次に当該文庫の現在について高橋氏は、学問の分野が細分化していくなかにあって、文庫の全体像を把握することができる目録の意義について言及された。最後に入口氏は、これからの文庫の活用例の一つとして、国文学研究資料館が推進する「文献観光資源学」に触れつつ、地方の文献や資料を資源として活かすことの期待について述べられた。

## おわりに

近年中に完成が予定される漢籍編と国書(近世)編を含めた4つの総合目録により、その膨大かつ貴重な資料を有する文庫の全体像を把握することが可能となり、これを用いた研究のさらなる発展が期待される。また中川文庫セミナーと中川文庫シンポジウムを通して、当該文庫はもちろん、そこに蔵される資料に対する地域の方々の理解に貢献できたと考えられる。今回の研究成果が学界のみならず、地方創生の一助となれば幸いである。



祐徳稲荷神社本殿(筆者撮影)



中西智子著

# 『紫式部の「ことば」たち 源氏物語と引用のコラージュ』

和田 律子（流通経済大学名誉教授）

本書は、平安文学研究者中西智子氏の、『源氏物語』のことば（原文）の奥に潜む不可思議で興味深い魅力を、読者の方々に広くお伝えしたいという願いがこめられた一書である。

中西氏のことばに対する畏敬の念は篤く、本書にも「作品の文章そのものこそが、やはり最も豊かで味わい深いもの」（「あとがき」p98）、「紫式部の「ことば」たちを、当時の人々が楽しんだように、現代の読者の方々に味わっていただく」（p7）きたいとある（以下、傍線部を付した部分を「ことば」と表記する）。

中西智子氏は、前著『源氏物語 引用とゆらぎ』（新典社、2019年）で、「ことば」は多様な意味を内包する重層性を持ち、かつ、諸条件により変容するもので、それが作品を豊かにする基になっているのではないかと考えた。そして、それを「ゆらぎ」と表現した。本書における「ことば」も、そのような特性をもつ「ことば」だと理解したい。本書では著者は前著を踏まえたうえで、物語の「作り手」が作品に「仕掛け」する「ことば」の操作を、「ことばのコラージュ」（切りとり貼りつける操作）と名付け、「ことば」のもつ深遠なる魅力をいっそう細やかに解き明かす。

著者は、予測不明な紙の落ち方の解明の限界を吐露した、理学博士中谷宇吉郎の文（『科学の方法』岩波書店、1958年）の一節、「あちらにひらり、こちらにひらり」を引き、「ことばの意味するところは紙の動きに限りなく近い感じがする」（p94）と述べる。『源氏物語』に「ひらり」「ひらり」と舞う数多くの「ことば」たち。そのなかの「コラージュ」する「ことば」を著者はすくいあげる。そして、平明なことばで、丁寧にしなやかに仕掛けを読み解いてゆく。この過程は、あたかも著者と一緒に謎解きをしているかのようで、面白く楽しく好感をもって読める。読者の方々に向けての著者の思いと配慮が「中西氏のことば」に反映され、氏の持ち味が発揮されている部分でもある。

以下に、本書の構成を示す。

はじめに

一 万葉歌の古さと新しさ 平安中期の古歌復興状況／「赤裳垂れ引き」玉鬘／「入りぬる磯」の若紫／「月待ちて」女三宮／演出される〈誘う女〉像

二 嘆老歌の悲劇と喜劇 反復される浮舟の「世のあらぬところ」／嘆老歌の二面性の継承〈エロス〉と〈タナトス〉の行方／物語作者の挑戦

三 梅香をめぐる官能性と老い 浮舟詠と『紫式部集』四六番歌／「さだすぎたる女」と梅香の〈エロス〉／朝顔斎院のユーモア／手習巻の浮舟と〈タナトス〉／「画賛的和歌」と紅梅の記憶／女の官能性と老いの主題

四 虚構と現実のあわいに 『源氏物語』と藤原道長家の人々／中宮彰子による一条天皇哀傷歌／紫式部と伊勢大輔の贈答歌／大弐三位賢子と乳母の贈答歌／「作り手」圏内の人々の共

同的な記憶

おわりに

詳細は省略せざるを得ないが、目次のなかの、著者が選り取った「ことば」のいくつかに傍線を付してみた。「ことばのコラージュ」により、物語世界はいかように変わるのだろうか。

『源氏物語』には『万葉集』が数多く引用されているが、本書の「ことば」にも『万葉』の古歌が目立つ。第一章を例にみると、「背伸びした」「おませな」若紫が「入りぬる磯」（p15）と、「幼い」「無邪気な」女三宮が「月待ちて」（p22）と口ずさむ場面。引用元の二首は、ともに、成熟した男女の恋情を詠んだ、〈誘う女〉のイメージも付与された、当時はよく知られた『万葉』歌である。それが物語のなかで、幼さを残す二人の発する「ことば」になったとき、「ことば」には「ずれ」（p29）が生じ、それが物語世界の新たな魅力や関心を惹起するのではないか。以下各章で、著者はさまざまな場面の「ずれ」が看取できる「ことば」を俎上に乗せる。そして、「重層的な物語世界を作り上げ」（p96）るべく仕掛けられた「ことばのコラージュ」が、作品を創造する方法としていかに有効に利用されているかを解いてゆく。

また、最終章の第四章では視点を換え、『源氏物語』の社会的影響力に目を向ける。「連載物のような感覚」（p75）で『源氏物語』を共有した読者たちにより、「高度な引用表現」で「再利用」された「ことば」が、変容を繰り返し、現代にまで影響を及ぼしている流れを論じるが、要所要所に「ことば」に注視する著者の新見がみられ、読みごたえがある。

なお、各章の随所には、内容にふさわしい多くの図版（すべて国文学研究資料館所蔵）とそれに付された簡潔な説明があり、読み進めるうえで読者の理解を助けてくれることも付記しておきたい。

近時、たましん美術館において、「源氏物語の新世界」展（傍線筆者）が開催された。中西氏も企画に携わったと伺った。同展は、「読者を創作へ、表現へと駆り立て」「さまざまな創作活動を刺激し」（国文学研究資料館館長渡部泰明氏「ごあいさつ」）、「しなやかに変容を繰り返してきた」（同展チラシ）『源氏物語』の「新世界」を、広く現代社会に発信することを目指した斬新な展覧であった。『源氏物語』の多様性と可能性を「ことば」から論じた本書は、同展観と表裏の関係にあるとも言えるのではないだろうか。

『源氏物語』研究が「新世界」に入ったことを、実感しつつ読んだ。





大関真由美・菅井優士・西村慎太郎編著

## 『古文書解説事始め—福島県大熊町の古文書で学ぶくずし字入門—』

田仲 桂（いわき市文化財保護審議会委員）

本書は、福島県大熊町の中野家に伝わる15点の古文書をテキストにした古文書解説の入門書だが、実際のところそれ以上の様々な可能性を示唆してくれる一冊である。

タイトルにある福島県大熊町は、福島第一原子力発電所が立地する町で、2011年の東日本大震災の直後に起きた原発事故で全町避難を余儀なくされた。今なお町域の50%あまりが帰還困難区域に指定されており、町内人口は震災前の約1割に留まっている（2025年2月末現在、大熊町HPより）。町は帰還・移住・定住支援や生活支援、企業誘致や産業創生などに取り組んでいる真っ最中だ。

そんな町の歴史の一端をひもといているのが本書である。古文書解説の基礎を学べ、大熊町の歴史に触れることができる。全体を通して読みやすく、読者のための工夫が多く盛り込まれているので、くずし字を学びたい人にとってはもちろん、くずし字には興味はないが大熊町の歴史を知りたい人にとっても、手に取りやすい一冊になっている。

本書の構成は、

- ・ 福島県大熊町の古文書で学ぶくずし字講座
- ・ 福島県大熊町熊中野家とその文書群について
- ・ 第一部 くずし字に触れよう
- ・ 第二部 実践くずし字講座 大熊町被災資料で学ぶ

である。

「福島県大熊町の古文書で学ぶくずし字講座」の項では、コンセプトと目的を記す。すなわち、読者が「古文書とくずし字の基礎を学びつつ、大熊町の歴史の一端を知り」、「大熊町の文化と歴史、そして古文書に興味・関心を持つ」ことを目指している。続いて、大熊町の歴史の概要が述べられ、第二部で取り上げる古文書の背景がここで押さえられる。

「福島県大熊町熊中野家とその文書群について」では、中野家の歴史および歴代の当主について丁寧な解説を加えている。文書が伝えられてきた地域や中野家の概略が簡潔にまとめられ、これにより第二部の理解度がより深まる。

くずし字を読み古文書を解説することは、決して容易なことではない。第一部の「くずし字に触れよう」では、まず現代の人々がくずし字を読めない理由が挙げられている。冒頭でこれを読んだ読者は、きっと肩の力を抜いてくずし字を読んでみようという気になるだろう。筆遣いや解説のコツ、頻出文字、上達するトレーニング法も書かれているのは嬉しい。筆者も市民向けの古文書講座で講師をしているが、教える立場から見ても非常に参考になるものだった。

第二部の「実践くずし字講座」は、近世～近代のもの15

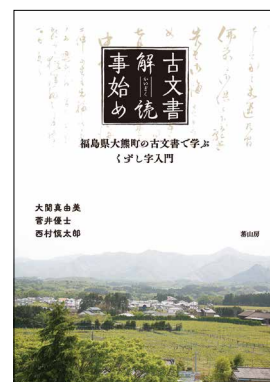
点を取り上げられている。知行、塩釜役、藩主の書付の写し、物流、災害の風聞、プライベートな手紙など、内容は幅広い。初心者むけのテキストとなるべき文書を過不足なくピックアップするのは、いささか大変だったのではと想像する。古文書の写真を掲載し、ページの上段に翻刻、下段に現代語訳、そのあとに用語の説明と全体的な解説を載せる。特に用語については丁寧に説明しており、歴史に明るくない人でも理解しやすいと思われる。浜通り（福島県の太平洋沿岸部の地域）の地名や人名が出てくる文書は、その地に住まう読み手の興味を引くだろう。

さて、本書では読者のターゲット層については言及されていないが、主に大熊町民であろうと思う。この「あえて内向き」のベクトルは大事だと考えている。地域に伝わる歴史資料を次世代につなげる主役は地域住民で、そのためには歴史や資料そのものに関心を誘う取り組みが不可欠だ。冒頭に述べた通り、大熊町の町内人口は震災前の約1割に留まっている。町に住む帰還住民、町外から故郷と関わる住民、新しく越してきた移住者がこれからの町を創っていく。そのようななかで、町内で文化財レスキューが進められ、救出された古文書がテキストとしてまとめられた意義は大きいだろう。

本書に啓発されて、ほかの被災自治体でも編纂の要望があがるのではないだろうか。実際に、筆者が双葉郡双葉町（大熊町の北に隣接する）の住民に本書を紹介したところ、自分たちの地域でも本を作りたいという話が出た。住民自身が我が町の歴史や文化をアーカイブし、次世代に伝える取り組みを喚起させるツールにもなっていることは、希望であるとすら感じる。

少し抽象的になってしまうが、本書からは読者に対する眼差しの優しさが滲み出ている。古文書や地域の歴史、各所の地域住民の皆さんと向き合っている編著者3名の、常日頃の業務やご活動や真摯な姿勢の賜物と思う。

人口減少による地域の消滅がいわれるようになった。そんな時代に、私たちの身近な歴史を身近な所に伝わる古文書から深掘りして描く『古文書解説事始め』のような書籍は、今後ますます求められるのではないだろうか。



(藩山房2024)

## 2024 年度こくぶんけんトーク

### 『源氏物語』をよんだ中世人—解釈の揺れはいかに生まれたか—（取材記）

国文学研究資料館の教員が、対話をしながら講座を行う「こくぶんけんトーク」。今年度は、室町時代の和歌が専門の川上一助教による標記講座が、2025年2月19日（水）に館内2F 大会議室で開催されました。

『源氏物語』の研究史において室町時代は、出典指摘を主とした「古注」が下火になり、和語への関心の下に解釈を深める「旧注」が興った時期に当たります。講座冒頭では、藤原俊成による有名な評語「源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり」の生まれた事情を切り口として、それ以降の『源氏物語』の権威化（古典化）、そして古注から旧注への変遷がいかに進んだのか概観されました。

そして本題として取り上げられたのは、第七帖・紅葉賀巻の和歌「袖濡るる露のゆかりと思ふにもなほうとまれぬやまとなでしこ」。桐壺帝の後妃でありながら、義子・光源氏との不義の子を宿した藤壺が、源氏に瓜二つの容貌で生まれた若宮を見て、複雑な心境を述べた歌です。その第四句「なほうとまれぬ」は、助動詞「ぬ」の解釈をめぐる完了説（＝やはり疎ましく思われる）と打消説（＝やはり疎むことはできない）がいずれも成り立ちうることから、現代に至るまで論争の対象となっ

ています。

本講座ではその「解釈の揺れ」について、正解を決めるのではなく、「揺れ」の生まれた背景を「旧注」の中に探るという、新たな視点での議論が展開されました。「古注」の時代は言及もされなかった「ぬ」の意味について、打消説を主張し始めたのは、「旧注」の中でも連歌師の著した注釈書であること、対する公家の注釈書はいずれ完了説を前提としていることから、連歌師による実作のための『源氏物語』利用が打消説を生み出すに至ったのではないかと推論する川上助教のお話は、中世文学研究者ならではの見解であり、日頃「解釈」を追究している稿者の立場からは斬新に受け止められました。

講座の後半には、『源氏物語』を専門としコーディネーターを務めた中西智子准教授の進行で、質疑応答が行われました。参加者からは、かつて完了説が支配的だった理由、公家歌人と連歌師の『源氏物語』利用の違い、『源氏物語』の研究史が男性に支えられた経緯など多くの質問が寄せられ、啓発的な議論を経て本企画は盛会のうちに終わりました。

（九州大学准教授 岡田 貴憲）

## 国文学研究資料館・たましん美術館 共催展示

### 源氏物語の新世界—明け暮れ書き読みいとなみおはす—

2025年1月11日（土）から3月16日（日）にかけて、立川市のたましん美術館において当館との共催で「源氏物語の新世界—明け暮れ書き読みいとなみおはす—」展が開催されました。当館とたましん美術館との共催展示は、今回が初の試みです。

1章「物語をつたえる」では、伝為家筆本や榊原本といった『源氏物語』の鎌倉写本をはじめ、読者増加の契機となった承応3年（1652）刊の絵入り『源氏物語』などが目を引きました。続く2章「物語をたのしむ」では、江戸前期の『源氏物語団扇画帖』などの絵画資料や『源氏かるた』といった遊戯関係資料が並び、来館者の目を喜ばせました。3章「物語をつくりかえる」では、「宇治十帖」のその後を描いた『山路の露』などのいわゆる二次創作、さらに柳亭種彦作『修紫田舎源氏』といったパロディ作品が展示され、読むだけにとどまらない『源氏物語』享受の奥深さが窺えました。

本展では国文研が2017年から行ってきたアーティス

ト・イン・レジデンス（AIR）プログラムともコラボしました。2名の若きアーティストが、1年以

上をかけて国文研の研究者と『源氏物語』を題材としたワークショップを重ね、その中でそれぞれがインスピレーションを受け創作した美術作品が展示されました。お2人の作品から『源氏物語』の「現代」における享受の姿を窺い知ることができました。

本展は、ちょうどNHK大河ドラマ「光る君へ」（2024年放送）の終了直後から開催されたこともあり、関連のトークイベント&ワークショップおよび国文研研究者によるギャラリートーク（全4回）には多くの方にお越しいただきました。会期中の総来館者数は約6200人。ご来館いただきました皆様に深くお礼申し上げます。

（河田 翔子）





## 「ないじえるトークイベント&ワークショップ」

### 源氏とあそぶ。源氏をまとう。

国文学研究資料館では、「ないじえる芸術共創ラボ アートと翻訳による日本文学探索イニシアティブ」事業を通じて、さまざまな分野で活躍するクリエイターをアーティスト・イン・レジデンス (AIR) とトランスレーター・イン・レジデンス (TIR) として招き、研究者とともに古典籍を紐解き、新たな文化・芸術的価値を創出しています。

2025年1月31日に、たましん美術館との共催展示「源氏物語の新世界ー明け暮れ書き読みとなみおはすー」の関連イベントとして、現在 AIR で活動中の芦川瑞季氏 (版画家) と成瀬拓己氏 (画家)、さらに元 AIR の染谷聡氏 (美術家/漆芸) によるトークイベントとワークショップを開催しました。

前半のトークイベントでは、まず3名の AIR が「ないじえる」における自身の活動を紹介し、研究者と古典籍との「共創」にインスパイアされた作品とその創作過程を参加者の皆さんと共有しました。

「遊びの思考」というテーマに関心を抱き、ないじえるに参加した染谷氏は、東海道五十三次の景色を鉢の中に作った「鉢山」を描く江戸時代の絵本『鉢山図絵』との出会いを契機に五十三次の地を巡り、風景を「縮景」して飾る作品シリーズ「みしき」の新たな展開について紹介しました。

芦川氏は、研究者とのワークショップをきっかけに『源氏物語』を読み直し、登場人物の感情や表情を表に出さず、植物や周囲の人物の描写を通じて内面を描くという表現手法に注目しました。この特徴が、現代の SNS 文化に見られる、相手の感情が見えにくいコミュニケーションの在り方と共通することに着想を得て、「押えこまれた感情」というテーマで現代社会と『源氏物語』の関

係性を探る作品《私が私を笑うとき》を創作したことについて語りました。

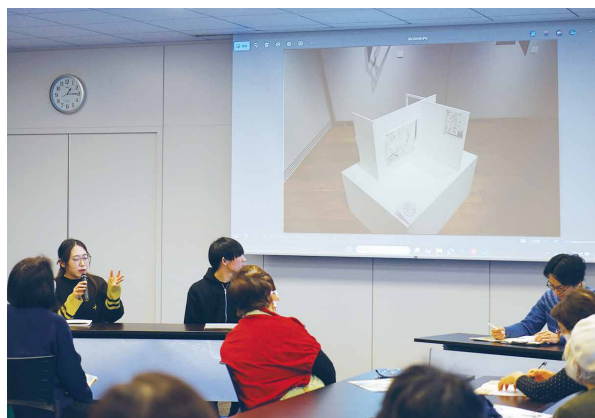
成瀬氏は、『源氏物語』の絵画化作品において同一の場面が同様の構図で繰り返し描かれるという特徴に着目した、『源氏物語』の「形」を現代の芸術表現に置き換える CG 作品の制作について解説しました。例えば、『をさなげんじ』の若菜上の挿絵と、歌川豊国の錦絵「源氏絵物語」の構図と色彩を取り入れた《若菜上》や、源氏香にインスピレーションを受け、『源氏つまこゑ』『源氏かるた』など古典籍の文字を記号として使い、『源氏物語』五十四帖のイメージに基づいて54個の香水瓶を制作した《源氏香によるストラクション》など、古典が現代アートにおける無限の可能性を提示する作品が紹介され、参加者を驚嘆させました。

イベントの後半では染谷氏を講師に迎え、古典籍の画像を印刷したシートを自由に切り貼りして独自のデザインを作成し、それを漆でコーティングして仕上げる、オリジナル封筒制作の体験型ワークショップを行いました。

アフタートークで染谷氏は、参加者が制作した封筒をコピーし、「オリジナル源氏物語封筒」として使い続けていくことを提案しました。これは、古典を単なる鑑賞・保存の対象として捉えるのではなく、日常生活の中に積極的に取り入れ、活用していくという、新たな継承のあり方を提示する試みといえます。

今回のイベントは、古典文化が現代社会における多様な可能性を孕んでいることを示し、それを多角的な視点から共有・体験する貴重な機会となったと思います。

(立正大学専任講師 黄 豆)



トークイベント会場の様子



制作中のオリジナル漆封筒

## 福島県双葉郡大熊町と国文研との学術協定締結

2025年1月22日、福島県双葉郡大熊町と当館との間で「学術交流・協力に関する基本協定」が締結されました。大熊町は東京電力福島第一原子力発電所事故のため、現在でも町域の半分が帰還困難区域に設定されている自治体です。当館では、人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」国文研ユニット「人命環境アーカイブズの過去・現在・未来に関する双方向的研究」（2016年度～2021年度）、同研究プロジェクト「横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して」国文研ユニット「人口減少地域におけるアーカイブズと歴史文化の再構築」（2022年度～2027年度（予定））において、大熊町の文化財・歴史資料の救出・保全を同町の住民と行い、歴史・文化の継承を進めてきました。その成果として、大関真由美・菅井優士・西村慎太郎編『古文書解説事始め一福島県大熊町の古文書で学ぶくずし字入門一』（蕃山房、2024年）が刊行されました。

今回の基本協定では、文化財・歴史資料の救出・保全はもちろん、講演会・セミナーや渡部泰明当館館長が計画する「町道場」の開催、資料の画像公開などを行い、同町の住民皆さんと協働して歴史・文化の継承を推進したいと思います。

最後に、今回の基本協定締結に当たって、吉田淳町長をはじめとして、生涯学習課の皆さん、特に学芸員の菅井優士さんには大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。（西村 慎太郎）



## 国際連携部「文献資料ワークショップ」～デジタル時代にこそ原本に触れて～

「文献資料ワークショップ」は、デジタル化が進む中でなおデータ化しにくいと指摘される研究ノウハウの伝達に関する問題と、アクセス自体が改善された一次資料の実際の利活用に際して不可欠な技術や経験の取得に関する問題とを深く意識し、その解決に向けて貢献できるような試みとして2020年の秋に発足した、当館国際連携部の事業です。2022年からは当館協定先であるIUC（アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター）との共催に移行し、ハイブリッド形式を毎回併用しながらも当館蔵の資料に実際に触れる対面中心の性格に重点を置いて行ってきました。

### 【観覧記】

山本先生の講義では「装飾経」という資料に関する基本知識を押さえたうえで、その絵と本文それぞれに対する様々な研究方法について学ぶことができました。講義の後には、資料を実際に見る貴重な機会があり、数点の巻物に直接触れながら、その保存方法からその大まかな研究史まで先生にいろいろ教えていただき、本当に印象深い体験でした。特に印象的だったのは、巻物の保存状態が素晴らしく、千年以上前の成立にもかかわらず虫食いがわずかしかなかったことです。

このワークショップを通じて、前近代日本の写本に対する理解が深まり、また驚くほど豊富に伝わる資料について知ることができ、大変充実した時間となりました。

ヴァルマ・ラヴァニヤ（IUC）

一昨年度から初めて館外から講師を招聘することが叶いましたが、その成功をうけ、昨年度も下記二方の先生にお越しいただきました。

- 第11回 「経絵の世界—仏典と説話が重層するイメージを読み解く—」

山本聡美（早稲田大学・教授）[2024.11.13]

- 第12回 「なぜ連歌は句を懐紙に書くのか」

松本麻子（聖徳大学・教授）[2025.2.21]

以下は、昨年度第11回に対面で参加した学生による観覧記を（一部）翻訳したものです。

（ノット・ジェフリー）





## 第48回国際日本文学研究集会

2025年5月10日(土)・11日(日)、国文学研究資料館にて第48回国際日本文学研究集会を開催しました。今回も当館大会議室での対面開催と Zoom・YouTube によるオンライン配信を併用したハイブリッド形式での実施となり、対面・オンラインをあわせて延べ208名の方にご参加いただきました。

発表は2日間にわたり行われ、発表者15名、インフォメーション・セッション発表者2名、計17名が登壇しました。初日は主に『古事記』『伊勢物語』『枕草子』『平家物語』など日本古典文学を対象とした多彩な研究が展開され、二日目には宇野信夫、松岡譲、金子みすゞなどの近現代作家を取り上げた発表が続きました。新資料の紹介や国際的な視点からの分析も多く、刺激的で学術的にも充実した内容となりました。

各発表には、第48回国際日本文学研究集会専門部会委員の先生方がコメンテーターとして登壇し、的確かつ丁寧なコメントを行いました。発表者との間では濃密な意見交換が行われ、さらに会場およびオンライン参加者

からも積極的な質疑が寄せられ、終始活発な議論が繰り広げられました。

また、対面会場では休憩時間を利用して自然な交流が生まれ、発表者・参加者・教員が和やかな雰囲気の中で親睦を深める貴重な機会となりました。

本研究集会の企画・運営にご尽力いただいた第48回国際日本文学研究集会専門部会委員の先生方をはじめ、ご発表いただいた皆様、ご参加くださった皆様、関係各位に心より御礼申し上げます。(劉 娟)



## 人文機構研究プロジェクト国文研ユニット「人口減少地域におけるアーカイブズと歴史文化の再構築」シンポジウム

### 『終わっていない、逃れられない〈当事者たち〉の震災俳句と短歌を読む』刊行記念 言葉にできない空気をぶっとばせ！

2025年3月8日、人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して」国文研ユニット「人口減少地域におけるアーカイブズと歴史文化の再構築」(2022年度～2027年度(予定))の成果報告として、加島正浩著『終わっていない、逃れられないー〈当事者たち〉の震災俳句と短歌を読むー』刊行記念シンポジウム「言葉にできない空気をぶっとばせ！」を国文学研究資料館大会議室にて開催しました。加島正浩氏の『終わっていない、逃れられないー〈当事者たち〉の震災俳句と短歌を読むー』(文学通信、2024年)は、本書の帯文に「凄惨な出来事の「以後」を生きざるを得なくなった歌人や俳人たち——その歌をささえる〈なにか〉を探す」と記されているように、震災・原発事故にまつわる句集・歌集を取り上げて、その俳人・歌人がいかに人びとに訴えようとしているかを検証したものです。

当日は著者の加島正浩氏(富山高等専門学校助教。当時)をはじめとして、社会学者の石川洋行氏(明治

学院大学非常勤講師)、本書の表紙の絵の作者である美術家の金原寿浩氏、本書でも引用されている歌人の三原由起子氏、そして歴史研究者の立場から当館の西村慎太郎が登壇しました。会場には31人が来場し、YouTube ライブ配信は234名の方がたが視聴しました(3月21日現在467視聴)。

様々な分野の専門家が加島氏の著書を検討し、いまだに続いている原発事故をどのように考えるかという議論を展開することができました。そして、加島氏がサブタイトルにも掲げた〈当事者たち〉とは、原発事故を詠む俳人・歌人たちだけでなく、いまだに原子力緊急事態宣言が終息していない日本国内すべての人に該当するのだということを痛感することができました。

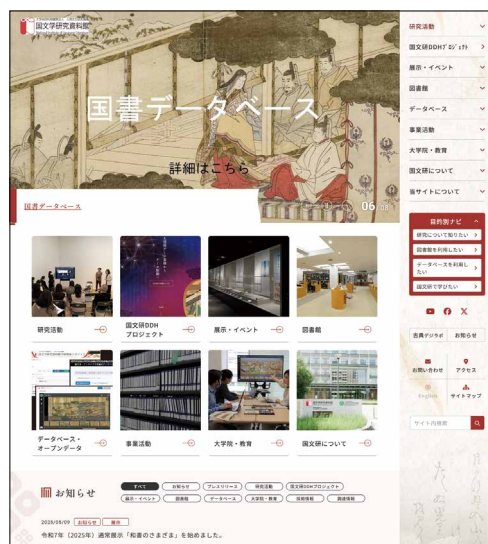
(西村 慎太郎)



国文学研究資料館のホームページがリニューアルします！  
—— 国文研の活動と研究成果を広く届けるために

「何の研究をしているの?」「DPHって、いったい何?」

そんな素朴な疑問にこたえる新しいホームページが、今年オープンします。



研究活動と研究成果を発見しやすくなります！進行中のプロジェクトなど、これまで見えにくかった活動の中身を、わかりやすくご紹介します。新しく始まった「国文研 DDHプロジェクト」では、膨大な人文学データをデジタル技術で扱い、新たな視点や手法で研究を進めていく人文学研究への取り組みや今後の展望をお届けしていきます。また、さまざまな事業の内容が見えるよう、たとえば基幹データベースが、研究者や専門スタッフの見えにくい地道な活動を経て、どのように皆さんに届いているのかをご紹介します。これまで通り、展示やイベントの情報、データベースや図書館の利用案内、大学院教育の情報などもタイムリーにお伝えしていきます。

そして新たに、『古典×デジタル探究ラボ——ふれて、広がる、知の宝庫』をスタートします。

小さなお子さんから大人の方まで、幅広い世代の皆さんが古典に親しみ、デジタル技術を活用しながら、新たな発見や関心を広げていける場をめざしています。気楽に参加いただけるくずし字を読んでみよう！古典籍画像を使ってみよう！でじたる展示を観たり創ったりしてみよう！などの体験型の企画をご用意しています。さらに、館長室を出てこんにちは！や、人文知コミュニケーターのデジタル日記では、国文研で今日何が起きているのかを覗けるかも、などなど新しいコンテンツを順次お届けしていきます。興味がわくわくが広がる知的な遊び場へ、ぜひお立ち寄りください。新しくなった国文研ホームページ、どうぞご覧ください。（北村 啓子）



(ホームページのイメージ)

Web 展示「和書のさまざま－RIN-NE」を公開しました。

新たに360°/180°回転ビューアーを追加しました。

展示資料をさまざまな角度から楽しめます！

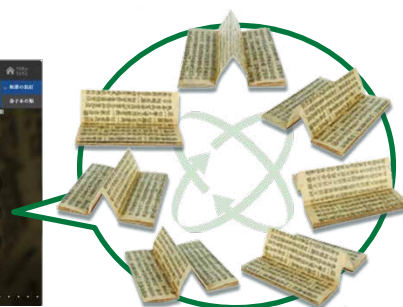
ぜひご覧ください！ (北村 啓子)



日本語



英語





## 総合研究大学院大学日本文学研究コースの近況

### ■伊藤美幸さんの学位取得

3月24日(月)、令和6年度春季学位記授与式が行われ、伊藤美幸さんが博士(文学)の学位を授与されました。おめでとうございます。ご本人からのお言葉を紹介します。

#### 伊藤美幸さん(課程博士)

このたび、無事に学位を取得することができ大変嬉しく思っております。主任指導教員の木越俊介教授をはじめ、これまでご指導いただきました先生方に心から感謝いたします。

振り返れば、博士課程に在籍していた5年間はあっという間でしたが、豊富な古典籍を閲覧できる国文学研究資料館の環境で学べたことは、私にとって非常に意味のある時間となりました。これまで得た知見や経験を大切に、今後も研鑽を積んでいきたいと思えます。ありがとうございました。



左から齋藤教授、木越教授、伊藤さん

### ■新入生懇談会を開催しました

4月18日(金)、当コースでは今年度1名の新入生を迎えて、在学生・教員と共に新入生懇談会を行いました。

懇談会では、新入生・教員・在学生の自己紹介の後、当コースの教育研究プロジェクトの調査により収集した、研究において重要な原本を熟覧しました。新入生の研究分野でもある近代作家の草稿をはじめ、様々な資料や日本古典籍について、それぞれを専門領域とする在学生と教員が解説を担当し、知見を深め合いました。続いて新入生の研究展望や教員の研究生活などを語り合い、親睦を深めました。

当コースは、国文学研究資料館の豊かな文献資料や、研究ネットワークを存分に活用できる点が大きなメリットです。今年度入学された新入生も、学位取得に向けて多くの文献資料に出会い、自身の研究手法を開拓して、充実した学生生活を送られることを願っています。



日本古典籍などを展覧する様子

### ■2024年度特別講義

#### 渡辺浩一教授「アーカイブズ史から環境史へ —松江漁師仲間記録と奥出雲のたたら製鉄—」開催

2025年3月19日(水)、国文学研究資料館にて令和6年度特別講義を対面とオンラインのハイブリッド形式で開催しました。講師を務めた渡辺教授は、3月末で定年退職を迎えることから今回が最終講義となり、館内外から多くの申し込みがありました。



渡辺 浩一 教授

渡辺教授は「アーカイブズ史から環境史へ—松江漁師仲間記録と奥出雲のたたら製鉄—」のテーマで、松江漁師仲間が書いた「松江湖漁場由来記」を都市社会史と環境史を交えて紹介しました。18～19世紀における漁業権を巡る様々な有り様を説明した後、たたら製鉄の廃土が漁業に与えた影響等を論じ、多様な歴史主体や研究分野の連関の必要性を述べました。

会場には、渡辺教授と長年にわたって親交のあった関係者が集まり、研究の歩みを熱心に聞き入っていました。講義後には多くの質疑応答があり、盛況のうちに終了しました。

## 2025年5月9日(金)～8月5日(火)

### 通常展示

#### 和書のさまざま

和書は、1200年以上に及ぶ長い歴史を持ち、その種類の多様さと現存する点数の多さは世界的にも稀です。そんな和書について各時代の写本や版本、特色ある本を紹介します。

### 特設コーナー

#### 『伊勢物語』を受け継ぐ

在原業平誕生1200年を記念して、当館鉄心斎文庫のさまざまな『伊勢物語』を紹介します。

## 2025年10月1日(水)～11月28日(金)

### 企画展示

#### 碧洋白田甚五郎のまなざし— 和歌・物語・歌謡

国文学者・民俗学者・歌人であった白田甚五郎博士(1915～2006)の旧蔵書コレクションのなかから、貴重な古典籍の数々を一般に公開します。

### 特設コーナー

#### 薦重、圧巻。大・中・小

薦屋重三郎版の書籍群を、本の大きさごとに大・中・小の3つに分け、各々の顔ぶれをうかがう小展示です。

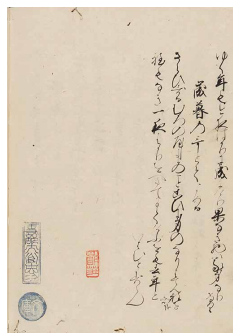
## 表紙絵資料紹介

### 『散木奇歌集』(当館碧洋白田甚五郎文庫蔵)

平安後期を代表する歌人である源俊頼<sup>みなもとのとしより</sup>の自撰家集。『散木奇歌集』は、春夏秋冬、祝・悲歎、恋上下、雑上下の十巻構成。伝本は、藤原定家書写監督で独自の異文を伝える冷泉家時雨亭文庫蔵本が抜きん出て書写年代が古く、その他はいずれも近世以降の書写で、十巻本と、雑上下がない八巻本がある。掲出した本書は八巻本で、袋綴二冊<sup>はなだ</sup>。縹色無地の原表紙、二冊とも原題簽欠。奥書識語なし。本文同筆の墨で集付や異本注記等の書入があり、第二冊末尾の五丁分に『田上集』からの抜写を付す。「吏部大卿忠次」「文庫」の蔵書印があることから、姫路藩主榊原忠次(1605～1665)のもとで書写された本と推断される。本文は島原藩主松平忠房<sup>まつただいらただふさ</sup>旧蔵本(国立国会図書館蔵)、林羅山旧蔵本(国立公文書館内閣文庫蔵)に近い関係にあり、文芸愛好の大名たちの書物を介した交流圏がうかがえることも興味深い。榊原家の蔵書目録で元禄12年(1699)の『御書物虫曝帳』、享和3年(1803)の『君公御蔵目録』に「散木

弃詞集<俊頼集>二冊」とあるのはこの本であろう。その後、榊原の所蔵から離れたのは一体いつの頃だったのだろうか。なお現在、榊原家伝来の資料は、九代政永以後明治維新まで藩主をつとめた上越高田の地の上越市立歴史博物館に寄託されており(公益財団法人旧高田藩和親会管理)、本書と書型・装訂が近似し、同じ忠次の蔵書印を有する、一具の平安私家集写本が複数現存する。当館碧洋白田甚五郎文庫蔵。白田博士旧蔵書の同文庫は、歌謡関係をはじめ、和歌・物語の古写本等優品を多く有する、広がりあるコレクションである。

(岡崎 真紀子)



散木奇歌集(記載書名: 散木弃詞集)  
コレクション  
国文学研究資料館, 碧洋白田甚五郎文庫  
国文研蔵請求記号 29-47-1~2



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国文学研究資料館

〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3  
Tel:050-5533-2910 Fax:042-526-8604

国文研ニュースNo.67

発行日 令和7(2025)年6月18日

編集 国文学研究資料館 社会連携部

製作 株式会社トリッド

©人間文化研究機構国文学研究資料館